

五代十国と宋（907～960・979～1279年）一年表

875年	黄巢の乱起る（875～884年）	
880年	朱温、唐に投降し、全忠という名をもらう。	
882年	李克用、長安をとりかえす。	
883年	黄巢、泰山の狼虎谷で甥に首をはねさせた。黄巢の乱終わる。	
884年	黄巢、長安で大齐皇帝と名のる。唐の僖宗、蜀へ逃亡。	
907年	唐朝がほろんでから華北（中原）では後梁・後唐・後晋・後漢・後周の順に五つの王朝（五代）が興亡した。	
916年	朱全忠、梁を建国（後梁）。唐朝滅亡。五代十国始まる。	
920年	華中・華南・华北の一部では吳・南唐・前蜀・後蜀・吳越・南漢・楚・北漢・荆南・閩（以上十国）や燕や岐などの諸国が興亡した。唐朝がほろんでから宋の成立までの50年ないし約80年間を五代十国時代という。	
949年	『昇元帖』成る（李煜が作らせた集帖の祖）	
960年	趙匡胤（北宋の太祖）、宋建国。	
979年	宋、ほぼ中国を統一。	
992年	『淳化閣帖』成る。	
1038年	西夏建国（西夏文字は1037年に制定）	
1045年	この頃畢昇、泥活字をつくつたらしい。	
1069年	王安石、新法を立案。	
1079年	宋、ほぼ中国を統一。	
1085年	旧法復活。	
1094年	新法復活。	
1100年	徽宗即位。	
1105年	蘇軾没（1036年生）	
1107年	黄庭堅没（1045年生）	
1115年	米芾没（1051年生）	
1123年	金建国される（女真文字制定は1119年）	
1125年	『宣和書譜』『宣和画譜』成る。	
1127年	靖康の変（徽宗、金に捕らわれ北宋滅亡する）	
1129年	宋の高宗、臨安（今の杭州）を都として宋を復興。南宋始まる。	
1139年	チングイス・カン、モンゴル王国（蒙古）を建てる。	
1206年	チングイス・カン、モンゴル王国（蒙古）を建てる。	
1227年	チングイス・カン、西夏をほろぼし、帰途に病没する。	
1234年	モンゴル、金をほろぼす。	
1234年	モンゴルのフビライ、国号を元とあらため、大都（今の北京）に元を建国。	
1271年	元により南宋滅亡。	
1275年	元寇、日本に来襲（文永の役）。マルコ・ポーロ、フビライに謁見する。	
1279年	元の勢力図（1294年）	
1279年	南宋の勢力図	
1279年	北宋代の勢力図	
1279年	五代十国の勢力図	



元の勢力図（1294年）

南宋の勢力図

南唐第三代皇帝。字は重光、姓は李、名は煜、号は澄心堂。在位は15年。李煜は、政治的能力はまつたくなかったが、文学、芸術的能力に優れ、詞の大成者であり、その詞は五代詞の最高峰とされる。李煜が、中国の文化、芸術にはたした役割には、はかりしれないものがある。たとえば、唐の玄宗が編曲した「霓裳羽衣の曲」の復元に尽力した。

「南唐画院」を創設した。これは、国家がはじめて振興した芸術学院で、すぐれた画家がここから育つていった。趙幹の「江行初雪図」は南唐の最高傑作といわれ、庶民がモチーフになった最初期の絵画である。

巨然は師の董源とともに、唐の王維にはじまる「南宗画（南画）」への道を開いた。巨然の「層巖叢樹図」は山水画の傑作である。

書は行書にたくみで、柳公權を好んだといわれる。集帖の祖といわれる『昇元帖』（949年）をつくらせ、単帖の『澄清堂帖』を刻したと伝えられるが、二つとも現存しない。書論に『書述』『書評』がある。

文房四宝の製造を国家あげておこない、文房具の発展に寄与した。

※「後主」とは、王朝の最後の君主の呼びかた。

※「詞」とは音楽に合わせて歌われた韻文の一つ。歌曲、樂府などともいう。詩と区別するため中国語で「詞」と言つたりとする。宋代で隆盛したので宋詞ともいう。

※「文房四宝」とは筆、硯、墨、紙のこと。



南唐後主・李煜

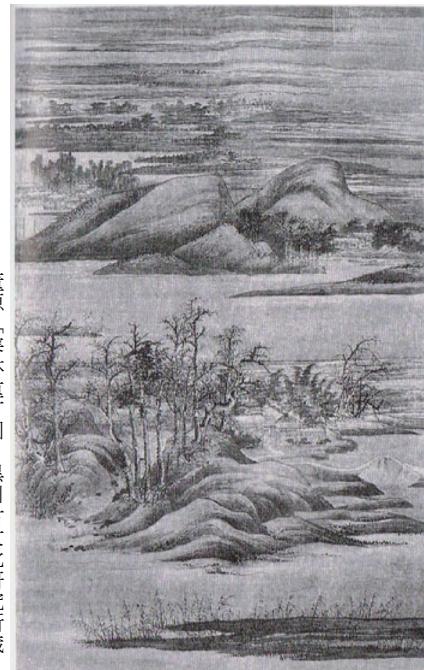


趙幹「江行初雪図」部分 台北故宮博物院蔵



巨然「層巖叢樹図」

台北故宮博物院蔵



董源「寒林重汀図」 黑川古文化研究所蔵

董源や巨然は江南（長江より南の地域）の山岳風景を描いた。
真冬に、薄着で漁をする庶民を正面からとらえた最初の絵画と思われる。

虞美人（李煜最後の作品）

春花秋月何時了

往事知多少

小樓昨夜又東風

故國不堪回首

月明中

雕欄玉砌應猶在

只是朱顏改

問君能有幾多愁

恰似一江春水

向東流

春の花、秋の月、それらは昔も今も変わることなく、尽きることを知らずめぐりきて季節をいろどる。それにひきかえ変わりはてたこの身、花を見るにつけ、月を見るにつけ、過ぎし日の思い出のみは数限りない。このわびしき高殿に、昨夜ましてもそよぐくる春風。はるかなる故郷、眺めやりでものおもう悲しさにどうして堪えられよう、さえわたる月明りの下に。

雕せし欄干、玉の砌、豪奢な宮殿は今もそのままに在るだろうに、ただこの身だけは、若き日の輝かしい容姿はどうやら、みじめに変わりはててしまった。わが胸に満ちる悲しみはいつたいどれほどといえばよからうか。長江に満ち溢れる春の水が、東を指して流れでゆくさまをそのままに、「こんこん」と流れで尽さるときを知らないのだ。

（村上哲見訳「中国詩人選集・李煜」）

浪淘沙令

簾外雨潺潺

春意闌珊

羅衾不耐五更寒

夢裏不知身是客

一餉貪歡

獨自莫憑欄

無限江山

別時容易見時難

流水落花春去也
天上人間

※「浪淘沙」は「波、砂をとぐ」と読む。

（村上哲見訳「中国詩人選集・李煜」）

文房四宝（紙、墨、硯、筆のこと）

ぶんぼうしほう

五代南唐の時代に、龍尾石硯、澄

心堂紙、李廷珪墨が作られ（李煜はこ

れらを文房三宝といった）それに、宋

代の諸葛高の筆が加わって文房四宝

が確立したと考えられる。李煜は文房

四宝の製造を国家あげておこない、そ

の後の中国の文房具の発展に大きな影響を与えた。



歙州硯（龍尾石硯、歙硯ともいう）

南唐官硯は、南唐の宫廷で作られた歙州硯。ほとんど現存しない。

龍尾石硯は歙硯の一種で、产地は江西省婺源県の龍尾山（羅紋山ともいう）である。

※「文房」とは読書や執筆のための部屋。

書齋。

李廷珪墨（李墨）ともいう

中国史上最高の墨といわれるが、現存しないようである。

廷珪は父と共に、唐末の戦乱を逃れて、故郷の易水から歙州に移住し、歙州の松をつかって墨業を起こした。古来「墨は黄山の老松をもつて最もすばし」と伝えられている。黄山は南唐に属していた。

李煜は廷珪のために、専用の工場をつくり援助した。

蘇軾の七言古詩に「非人磨墨墨磨人」とあるように墨は人よりも大切にされた。



李墨の図案

澄心堂紙 中国史上最高の紙といわれる。



乾隆仿澄心堂紙

「澄心堂」は、李煜の祖父（第一代皇帝）が金陵（南京）に建てた堂の名である。書斎として建てたのだろうか。執務室なのか。

李煜は蜀から紙づくりの名人の剝道をよび、紙をつくらせ、その紙を「澄心堂紙」と呼んだ。桑の皮を材料にしたらしい？

諸葛筆

唐・宋代に宣州（現在の安徽省宣城県）の諸葛氏が作った筆を諸葛筆という。

宋代の諸葛高の筆は蘇東坡や米芾によつて愛用されたという。

李煜は玉製の筆を作らせたらしいが、現存しているのかどうか、よくわからない。

法帖

「法帖」とは、古人の書作品を、鑑賞や保存や手本にする目的で、それらを石や木に刻して、その拓本をとり、それらを冊子に仕立てたもののことである。



集帖の『淳化閣帖』
「集帖」とは複数の書人の書を集めて刻した法帖のこと。



单帖の『雁塔聖教序』
「单帖」とは一つの作品だけを刻した法帖のこと。



中国の墨づくりは
ハンマーで叩いてこねる。



日本の墨づくりは、
手や足でこねる。

五代十国時代は、十五以上の国々にが乱立する乱世ではあるが、戦争のない国も多かつた。

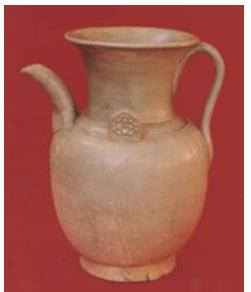
吳越は七十二年間、南漢は六十一年間、南唐は三十九年間、荊南、吳、後蜀は三十年以上平和がつづいた。

平和な国々にでは、文学や美術、工芸、音楽がさかんであつた。各地で隋唐の文化を継承し、次の宋代へとバトンを渡した。

大衆文化の誕生

各地に平民出身の王（密壳人、浮浪者、貧農など）が起ち、新しい文化の基礎を築いた。人びとは活気に満ち、はつらつとしていた。その庶民のエネルギーが社会の構造を変え、大衆文化を創造し、新しい時代を準備した。中で最も発展したのは南唐であつた。南唐が繁栄したわけは、六朝文化、隋唐文化の継承地であつた金陵（南京）が王都であつたことと、後主李煜の存在が大きい。李煜は、庶民のあいだに文化を根づかせ、何事にもとらわれないおおらかな大衆社会をもたらした。その成果は、北宋に受け継がれ、さらなる大輪の大衆文化を咲かせることがある。

南唐は、937年—975年の三十九年間、王都は金陵（江寧）、現在の南京。初代皇帝の李昇は浮浪兒であった。三代目の李煜の最後は哀れであつた。975年12月北宋に破れ、北宋の都・汴京（開封）に幽閉され、それから二年後の978年宋の太宗より誕生日として贈られた酒に猛毒をもられて殺された。42歳であつた。最後に作った「虞美人」の詞が毒殺の原因といわれている。



越州窯 青磁壺 五代
西洋の銀器の模倣



越州窯 秘色青磁
秘色とは瑠璃色のこと。
王室以外の使用を禁じたところから秘色という。晚唐から五代にかけて作られた。

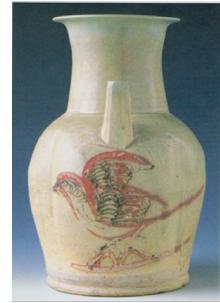
陶磁器

唐代では磁器は特權階級のための高級品であったが、五代十国時代になつて庶民用の日用品としても作られるようになつた。（量産、機能美、輸出の増加）

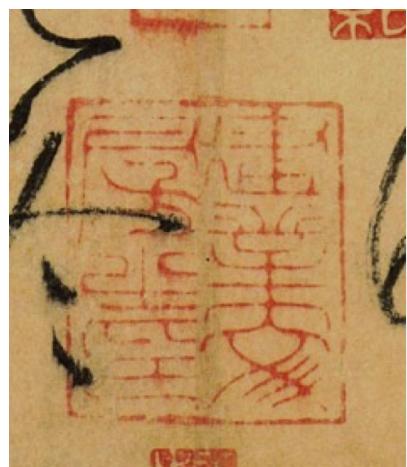
越州窯は浙江省北部の越州地方で青磁を焼いた窯。漢代末よりある古窯である。五代時代が最盛期で、「秘色青磁」が発明された。

長沙窯は「楚」の王都の長沙にあつた窯で、中唐が始まより五代に役目を終えたらし。ここで絵付陶磁が始まり、おもに青磁などの日用品が作られた。

長沙窯 五代 文字入り
「あなたと別れて千里
逢える時はまだ来ない
ひと月三十日
あなたを思わぬ夜は無い」と書かれている。



影版印刷術（木版に字を彫刻する印刷）
五代の一つである後唐（923—936年）の馮道により、最初の大規模な木版による印刷事業がなされた。



懷素の「自叙帖」におされた李氏の「建業文房之印」
これにより李煜が「自叙帖」を所蔵していたことが分かる。

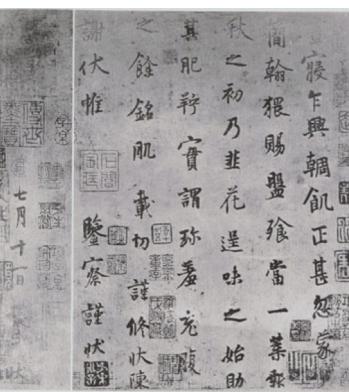
楊凝式（ようぎょうしき）
873年—954年

唐末から五代末に生きた人。出身地は華陰（今の陝西省渭南市）。字は景度。名門の生まれである。

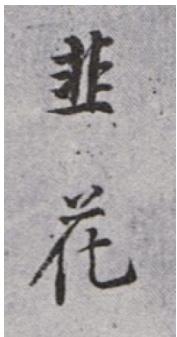
唐朝に仕え、唐がほろんでからは、五代の各王朝に仕えた。立身出世したが、世間からは楊風子と呼ばれた。「風子」とは狂人の意味である。乱世を行きぬくため狂人をよそおつたと言われている。

文章に巧みで、はじめ二王を極めてからち、顔真卿、柳公權を学び、楷書、草書に巧みであった。当時は王羲之の再来とまでたたえられたが、張旭、懷素の流れにある人で、宋の三大家が称賛してから有名になった。その書は、宋代以後の新しい書道発展の原動力のひとつとなつた。

韭花帖 紙に書かれた真跡。楷書。



步虛詞
936年（清泰三年）詞は唐の韋渠牟の作。草書。



たべものをもらつたことに対する
お札状。「韭花」とは「にら」のこと。
「・・・一葉が秋をしらせ、韭花の
味をますころ、このよく肥えた子羊
の料理はまことに珍しく、よろこん
で賞味したい・・・」

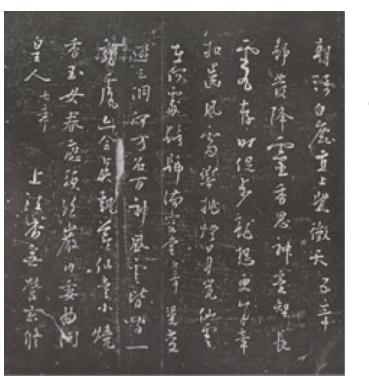
字大約15mm。



「歩虛詞」は、道家でうたう樂府の一種。「歩虛」とは仙人が空中歩行する意で、これは、神仙の歩くすがたの美しさをうたつた歌曲である。

「顔真卿、柳公權が没して、書道は衰えたが、楊凝式だけが、二王、顔、柳の伝統を受けついでいる。蘇軾、米芾も楊凝式の書を模範としていたようだ。」と董其昌の跋語がある。

顔真卿と懷素の流れにある書で、懷素の「草書千字文」に通じるものがあ

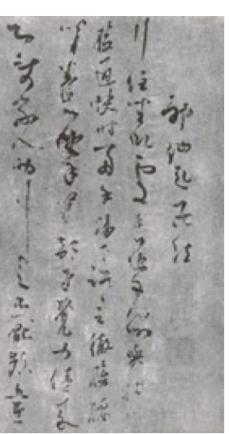


虎存時促歩。龍想更成章。

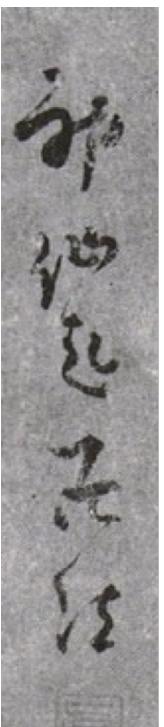
神仙起居法 948年（乾祐元年）紙に書かれた真跡。草書。

神仙を志すものの、日常の養生法を説いたもの。

道士からさずかつたものようである。
五言十二句の詩形になつていて。



神仙起居法



唐の盧鴻のかいた「草堂十志圖」の跋。宋の三大家の蘇軾、黃庭堅、米芾は頤法を継承して

いる楊凝式の行書を高く評価し愛好した。

顏真卿の「争坐位帖」に似たところがある。



山 水 樹

右僕射之襄郡王耶之閣下蓋太上
有立德其次有立功是謂不朽柳文

顏真卿「争坐位帖」より

旧暦（和暦・中国暦・天保暦・太陰暦・陰暦）と**新暦**（西暦・グレゴリオ暦・太陽暦・陽暦・NS）

日本では明治五年十二月二日（1872年）の翌日を明治六年一月一日として、新暦を採用した。（明治改暦）

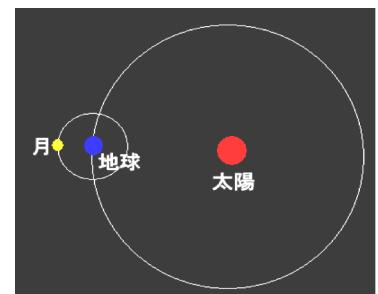
この日はグレゴリオ暦（新暦・太陽暦）の1873年一月一日である。それまで使われていた暦は、六世紀後半に百濟を経て中国から伝わった、太陽と月の運行にもとづいた太陰太陽暦（旧暦）であった。

中国では民国一年一月一日（1912年）、中華民国建国とともに新暦が採用され、同年二月十二日の清朝滅亡とともに中国全域で正式な暦となつた。

※グレゴリオ暦・1582年にローマ法王グレゴリウス十三世がユリウス暦を改良して制定した暦。新暦である。

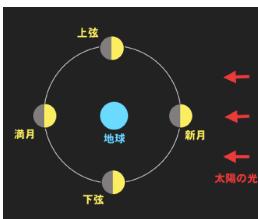
※ユリウス暦　・　紀元前四十五年一月一日から実施された太陽暦の一種。ユリウス・カエサルによつて制定された。

太陰太陽暦（旧暦） 太陰暦だけでは季節がずれてくるので、太陽暦を取り入れて調整した暦である。紀元前二千年ころメソポタミアの古代バビロニアつづいてユダヤ、古代ギリシャ、古代中国で作られた。旧暦、和暦、陰暦、農暦、月暦などともよぶ。



地球は太陽の周りを 365.2422 日（365 日と 5 時間 49 分 12 秒）で 1 周している。太陽暦では 1 年を 365 日とし残りの 0.2425 日を閏年で調整している。

月は地球の周りを平均 29.5 日で 1 周している。これは月の満ち欠けの 1 周期のことである。これを「朔望月」という。「朔」は新月、「望」は満月のことである。朔望月とは朔から次の朔、または望から次の望までの期間をさす。1 年を 12 ヶ月だとすると 12 朔望月は 12 ヶ月 × 29.5 日 = 354 日になり、太陽年より 11 日ほど短くなる。調整のため 19 年に 7 回、閏月を入れる。（11 日 × 19 年 = 209 日、209 日 ÷ 7 = 29. 85714285 日）閏月のある年は 1 年が 13 ヶ月になる。



月の満ち欠けとその和名	(17日の月)	立待月 たおまちつき	新月 しんげつ
(18日の月)	居待月 いまちつき	二日月 ふつかづき	三日月 みかづき
(19日の月)	寝待月 ねまちつき	上弦 じょうげん	弓張 ゆきば
二十日月 はつかづき	十日夜 とおかんや		
下弦 かげん	十三夜 じゅうさんや		
二十三日夜 にじゅうさんや	待宵月 まわらよいづき		
(14日の月)	十五夜 じゅうごや		
二十六日夜 にじゅうろくや	望 ぼう (満月) まんげつ	十六夜 いざよい	
(三十日の月) 晦日 みそか			

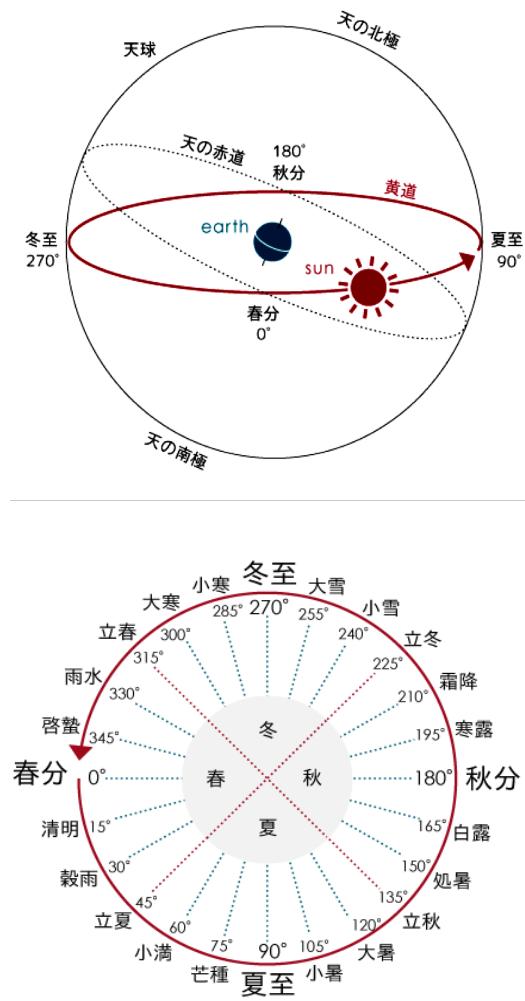
二十四節氣

にじゅうしせつき 暦の季節のズレを解消するために、中国で戦国時代の頃に作られた。これは、黄河の中・下流域の

氣候をもとに作られた。日本では中国の中原との季節感の違いを補足するために、「日本版の七十二候(京都を基準にしたと思われる)」や「雜節」を取り入れている。「雜節」には、節分、彼岸、社日、八十八夜、入梅、半夏生、土用、二百十日、二百二十日などがある。

黄道は太陽の見かけの通り道。黄道の春分点を起点として十五度ずつの二十四分点に分けてあるが、分点のあいだの日数は等しくない。一年を冬至と夏至、春分と秋分で四等分し(二至二分)、その真ん中に立春、立夏、立秋、立冬を置き四等分した(四立)。この二至二分と四立を合わせて「八節」とよび、その間隔は約四十五日である。さらにそれを三つに分けたものが二十四節氣または二十四氣である。一月～三月を春、四月～六月を夏、七月～九月を秋、十月～十二月を冬とし、春夏秋冬に分けた。各月は「節氣」と「中氣」に交互に分けられる。「黄経」は春分点を0度とし、東回りに三百六十度まで測った太陽と地球の角度である。

季節	月暦	節氣	名称	太陽暦の日付	太陽視黄經
春	一月 (臘月)	正月節氣	立春	2月4日	315度
		正月中氣	雨水	2月18・19日	330度
二月 (如月)	二月節氣	啓蟄	3月5・6日	345度	
		二月中氣	春分	3月20・21日	0度
三月 (彌生)	三月節氣	清明	4月4・5日	15度	
		三月中氣	穀雨	4月20日	30度
四月 (卯月)	四月節氣	立夏	5月5・6日	45度	
		四月中氣	小滿	5月21日	60度
五月 (皋月)	五月節氣	芒種	6月5・6日	75度	
		五月中氣	夏至	6月21・22日	90度
六月 (水無月)	六月節氣	小暑	7月7日	105度	
		六月中氣	大暑	7月22・23日	120度
秋	七月 (文月)	七月節氣	立秋	8月7・8日	135度
		七月中氣	處暑	8月23日	150度
八月 (葉月)	八月節氣	白露	9月7・8日	165度	
		八月中氣	秋分	9月23日	180度
九月 (長月)	九月節氣	寒露	10月8・9日	195度	
		九月中氣	霜降	10月23・24日	210度
十月 (神無月)	十月節氣	立冬	11月7・8日	225度	
		十月中氣	小雪	11月22・23日	240度
十一月 (霜月)	十一月節氣	大雪	12月7日	255度	
		十一月中氣	冬至	12月22日	270度
十二月 (師走)	十二月節氣	小寒	1月5・6日	285度	
		十二月中氣	大寒	1月20・21日	300度



太陽暦

(新暦、西暦、グレゴリオ暦)

古代エジプトで紀元前二千九百年頃生まれた、太陽年を基にして作られた暦。現在、日本はじめ世界各国で用いられている。一年を三百六十五日とし、四年に一回閏年を置いて三百六十日とし、四百年に三回閏年を置かない。

六十干支

(十干と十二支を組み合わせ、一から六十までの数字を

あらわしたもので十干十二支ともいう。殷代(紀元前十五世紀～十一世紀)

からあつた。干支は「えど」ともいう。十二支は、古代中国で、天球を

十二年で一周する木星の運行から考え出されたものらしい。

十干は「甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸」

十二支は「子、丑、寅、卯、辰、巳、午、未、申、酉、戌、亥」

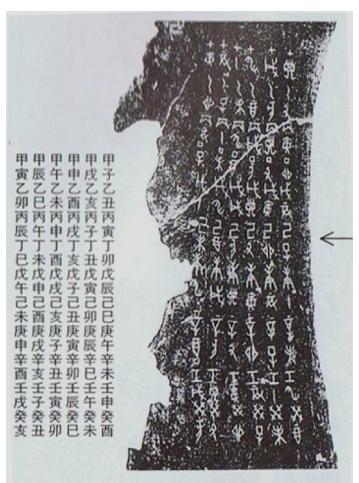
十干は五行(木・火・土・金・水)と陰陽の兄弟とつながつて、

甲は、木の兄、乙は、木の弟、丙は、火の兄、丁は、火の弟、

戊は、土の兄、己は、土の弟、庚は、金の兄、辛は、金の弟、

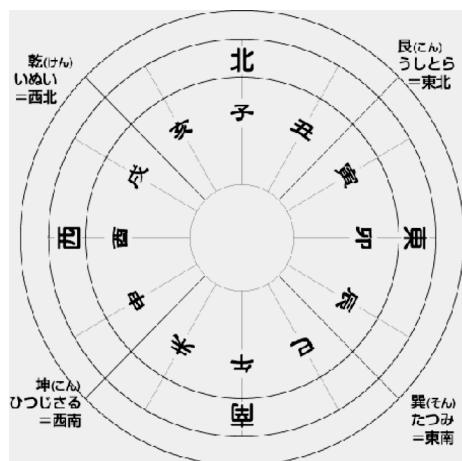
壬は、水の兄、癸は、水の弟と呼ばれた。

殷代・甲骨文
六十干支が刻されている。



0 甲 子	1 乙 丑	2 丙 寅	3 丁 卯	4 戌 辰
5 未 未	6 庚 午	7 辛 未	8 壬 申	9 癸 酉
10 甲 戌	11 乙 亥	12 丙 子	13 丁 丑	14 戌 辰
15 未 未	16 庚 辰	17 辛 巳	18 壬 午	19 癸 未
20 甲 申	21 乙 酉	22 丙 戌	23 丁 亥	24 戌 子
25 未 未	26 庚 未	27 辛 卯	28 壬 辰	29 癸 巳
30 甲 午	31 乙 未	32 丙 申	33 丁 酉	34 戌 戌
35 未 未	36 庚 子	37 辛 丑	38 壬 戌	39 癸 卯
40 甲 辰	41 乙 巳	42 丙 午	43 丁 未	44 戌 申
45 未 未	46 庚 戌	47 辛 戌	48 壬 子	49 癸 丑
50 甲 辰	51 乙 卯	52 丙 辰	53 丁 巳	54 戌 午
55 未 未	56 庚 申	57 辛 西	58 壬 戌	59 癸 亥

きのえね 甲子	きのとのうし 乙丑	ひのえとら 丙寅	ひのとのう 丁卯	つかのえたつ 戌辰	つかのとのみ 己巳	かのえうま 庚午
かのとのひつじ 辛未	きのとのうし 壬申	ひのえとら 癸酉	ひのとのう 甲戌	つかのえたつ 乙亥	つかのとのみ 丙子	かのえうま 庚午
ひのとのうし 丁丑	つかのえたつ 戊寅	つかのとのう 未卯	かのえたつ 庚辰	かのとのみ 辛巳	かのえうま 王午	ひのとのうし 未未
みずのとのひつじ 癸未	きのえさる 甲申	きのとのとり 乙酉	ひのえいぬ 丙戌	ひのとのい 丁亥	つかのえね 戌子	つかのえね 未未
つかのとのうし 己丑	かのえとら 庚未	かのとのう 辛卯	みずのえたつ 未辰	みずのとのみ 癸巳	かのえうま 甲午	かのえうま 未未
きのとのひつじ 乙未	ひのえさる 丙申	ひのとのとり 丁酉	つかのえたつ 戊戌	つかのとのみ 己亥	かのえね 壬子	かのえね 未未
かのとのうし 辛丑	みずのえとら 壬寅	みずのとのう 癸卯	つかのえたつ 甲辰	かのとのみ 乙巳	ひのえうま 丙午	ひのえね 未未
ひのとのひつじ 丁未	つかのえさる 戊申	つかのとのう 未酉	かのえたつ 丙辰	かのとのい 丙午	みずのえね 壬午	みずのえね 未未
みずのとのうし 癸丑	きのえとら 甲寅	きのとのう 未卯	ひのえたつ 丙辰	ひのえのみ 丁巳	つかのえうま 戌午	つかのえうま 未未
つかのとのひつじ 己未	かのえさる 庚申	かのとのとり 辛酉	ひのえいぬ 壬戌	みずのとのい 癸亥	かのえね 戌亥	かのえね 未未



日本では強引に新暦に変更したためおかしなことが多くある。

新暦にしたのはそれなりのわけがあるのだが、新暦の年月をそのまま旧暦の年中行事や季節の表現に使つたから異常な現象がみられるのだが、それを、なんとも思わないで惰性的にくりかえしていくことが恐ろしい。

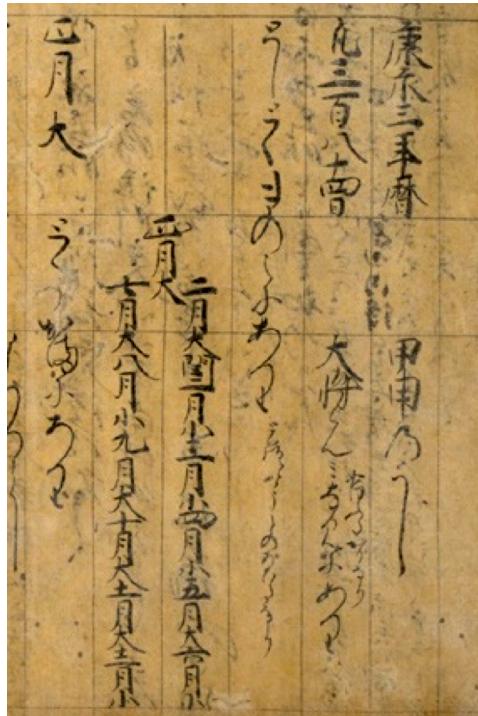
異常な現象がみられるのかどうか、それをなんとも思わないで慣習的にぐりかえしていることが恐ろしい

う意味で良いのかもしれないが、旧暦の正月一日は立春にちもとも近い新月の日とぎまつっていたので、正月は立春あたりからである。（立春は新暦の二月初旬～中旬。）中国では今も春節として祝う。そのほうが自然ではないか。）七草がゆを正月七日に食べているが、正月ころには七草はとれない。旧暦の正月七日は新暦では二月下旬ころである。七夕（七月七日）には、ほとんど天の川が見られない。七月七日はまだ梅雨があけていないだろう。（旧暦の七夕は新暦の八月初旬から下旬。）

もるなんて、異常気象だつたのか？（旧暦の十二月十五日は新暦の一月三十一日で最も寒い季節であつた。にもかかわらず、今でも十二月十四日あたりになると騒いでいる人たちがオオゼイいる。）

歴史年表の年号は西暦に変えてあるが、月日は旧暦のままにしてあるものがほとんどのようだ。

（年齢計算第二関フル法律）一千九百一年（明治三十五年）十二月二十二日施行。『年齢のとなえ方にに関する法律』一千九百五十年（昭和二十五年）一月一日施行。で政府は満年齢を推奨している。昔は數え年であり、しかも旧暦の生年月日の場合に、計算がややこしくて間違いも多いようだ。旧暦で数え年の時代の生年月日や出来事の日付は注意して計算しなくてはいけない。



卷之三	庚辰年春正月廿二日	本日晴
子	壬寅	丁未
丑	癸卯	戊午
寅	甲辰	己未
卯	乙巳	庚午
辰	丙午	辛未
巳	丁未	壬午
午	戊午	癸未
未	己未	甲午
申	庚午	乙未
酉	辛未	丙午
戌	壬午	丁未
亥	癸未	戊午

日本の南北朝時代の北朝のもの
仮名暦は日本での暦の普及に大きな影響を与えた。



書道もろもろ塾 4-7